

九州漢方来し方行く末

第1部 戦後九州漢方復興史
九州漢方の復興を支えた
九州漢方研究会

九州漢方研究会60周年記念講演
2018.9.16
橋原町立国保橋原病院
吉富 誠

本日のメニュー

- 1) 戦後九州漢方復興史
九州の漢方復興を支えた九州漢方研究会・復興期の漢方とは
- 2) 陰陽・虚実・寒熱の関係性について
- 3) 八綱と診断

1) 自己紹介



昭和29年唐津の漢方薬局に生まれる父兵衛は相見三郎先生に師事 塚本赳夫先生と共に九州漢方研究会発足に参画 和訓古今方薬 和訓万病回春 訓注和剂局方を著す

高校生物部で薬草展

浜田善利先生と薬草採集
高校の先輩に小曾戸洋先生



自己紹介

学歴 所属学会及び専門医資格
昭和60年佐賀医科大学医学部卒

職歴・研究歴 日本救急医学会専門医
日本東洋医学会専門医
日本医師会認定産業医
昭和60年熊本赤十字病院研修医
昭和63年熊本赤十字病院
内科医師 消化器内科 国際東洋医学会副会長
平成4年寿東漢医院(韓国ソウル特別市)にて漢方医学研修 国際東洋医学会日本支部長
平成5年公立菊地養生園診療所 日本中医学会理事
診療部長 日本東洋医学会高知県支部副会長
平成17年吉富復陽堂医院 院長
平成29年公立橋原病院 内科医師

4

2) 戦後九州漢方復興史 九州の漢方復興を支えた人たち



塚本赳夫 つかもと たけお

概説

- 漢方医学は明治以降衰退し、ごく少数の漢方医・薬剤師・鍼灸師・家伝薬業者が細々と漢方の命脈を保ってきた。
- 昭和25年日本東洋医学会は会員98名で発足
- 漢方復興は昭和30年代に開発されたエキス製剤が大きな原動力となり、薬局漢方が盛んになった。
- 昭和51年医療用漢方製剤の保健適用、さらに平成元年の専門医制度発足以降に多くの医師が東洋医学会会員となり現在に至っている。

九州漢方研究会

- 昭和33年9月創立。
- 初代会長は九州大学薬学部塚本赴夫教授
第2代会長九州大学西岡五夫教授
- 第3代目会長第一薬科大学木村孟淳教授
- 現在は元福岡大学副学長三橋國英先生

日本東洋医学会九州支部会

- 日本東洋医学会九州支部会は、九州漢方研究会会長の塚本赴夫^{たけお}先生・鹿児島漢方研究会会長小島喜久男先生が中心となり昭和50年2月2日に発足した。初代会長は塚本赴夫先生である。
- 同年5月30日第26回日本東洋医学会総会が福岡市明治生命会館で開催された。会長は小島喜久男先生・名誉会長塚本赴夫先生。
- 第1回九州支部総会は同年11月23日九州大学にて開催された。

塚本赴夫^{つかもと たけお}



- 大正11年東京大学医学部薬学科生薬学教室卒 朝比奈泰彦門人
- 昭和25年九大医学部薬学科主任教授
- 昭和35年福岡大薬学部長
- 日本東洋医学会総会名誉会長
- 昭和33年九州漢方研究会を創設
- 昭和50年小島喜久男と日本東洋医学会九州支部を立ち上げる。西岡五夫・原敬二郎・牧野健司など多くの弟子を育てた。
- 昭和52年逝去 享年79歳
- 弟の塚本憲甫^{のりふ}は国立がんセンター総長

朝比奈泰彦：明治14年-昭和50年東京大学生薬学初代教授 正倉院薬物の調査研究の団長を務めた

中山友記^{なかやま ともし}

M34.12.28～S61.11.10

- 柳川市生まれ
- 朝鮮総督府医師として奉職中に韓医師朴正熙^{박정희}に漢方を学ぶ
- 引き揚げ後小倉で漢方薬と鍼灸専門の医院を開業 自由診療
- 九州漢方研究会発足とともに入会し臨床医として会を支えた
- 著書「漢方臨床ノート」
中医学や山本巖先生の考えも取り入れられている



久保川憲彦^{くぼかわ のりひこ}

1909-1984

- 1930金沢薬学専門学校卒
- 1939九州大学農学部農芸化学科卒
- 1954福岡市西新に久保川薬局開局
- 九州漢方研究会理事長として会を支えた。
- 東洋医学会評議員
- 東京オリンピックヨット帆走委員長
- 著書「漢方のすすめ」



森光三^{もり こうぞう}

大正6年医薬品卸業釜山大黒家の三男として生まれ、後母方森家養子に
昭和15年京城薬専卒
大黒南海堂勤務
昭和30年長崎県川棚町にて漢方専門森薬局開局
九州漢方研究会設立に参画
昭和47年筑肥漢方研究会主宰
漢方の臨床誌に多くの論文を投稿 傷寒論の研究に生涯をかけ「傷寒論ノート巻1」を著す
昭和58年逝去佐賀医大に献体



昭和57年佐賀医大漢方研究会にて

九州漢方研究会石原明先生を囲んで
古湯温泉 山水荘



石原明(T13~S55)昭和20年日本大学専門部医学科卒 横浜市立大学医史学助教授 著書 漢方名医のさし加減

小島喜久男 こじま きくお

- 昭和10年熊本医科大学卒、修琴堂門人、昭和19年鹿児島大薬理学初代教授。
- 漢方を薬理学的手法で解明
- 昭和38年鹿児島漢方研究会を設立。昭和50年日本東洋医学会九州支部会を塚本らと設立。同年5月30日九州初開催の第26回東洋医学会総会を会長として開催。
- 昭和52年12月27日没66歳



昭和52年3月21日磯の島津別邸小島先生退官記念に大塚敬節先生来鹿
大塚敬節 大正12年熊本医専卒

小川 紘 おがわ ただし

- 昭和6年熊本医科大学卒
- 海軍軍医として上海・ラバウルに赴く
- 復員後熊本市にて開業、漢方・鍼灸を実践する
- 昭和25年より有機農業や自然食をとりいれた養生運動を始める
- 竹熊宜孝・橋本行生を東洋医学に導いた。



小早川 鐵夫 こばやかわ てつお

- 朴庵塾の荒木性次に漢方を学ぶ。
- 昭和29年熊本漢方研究会を設立して後進を育成した。



小曾戸 丈夫 こそと たけお

- 1940年、熊本薬学専門学校卒業
- 1941年、従軍。第58師団野戦病院付陸軍薬剤大尉。(中国大陸)
- 1947年から下関市で薬局経営。
- 1956年、荒木性次に入門
- 1966年から熊本大学薬学部講師(非常勤)、「漢方概論」を講義。
- 主な著書
「意積 黄帝内経素問」、「意積 黄帝内経靈枢」その他



浜田 善利 はまだ としゆき

- 1933年熊本に生まれる。
- 1962年熊本大学薬剤学科卒業、生薬学専攻、薬学博士。熊本大学薬学部助手、講師を経て、熊本工業大学教授。
- 主な著書「意積黄帝内経素問」「意積黄帝内経靈枢」「意積黄帝内経運氣」「意積八十一難経」「意積 神農本草経」(以上 築地書館)「熊本の薬草」「カラー版熊本の薬草」「傷寒雑病論」などがある。



左 小曾戸 右 浜田
熊大薬学部薬草園研究室にて
福富先生もこの研究室に参加

漢方復興期の漢方

- 昭和30年代以降の漢方復興期には主に薬剤師が漢方を支えた。漢方を実践する医師は極わずかであった。
- 昭和36年国民皆保険制度により、それまで薬局が担ってきたプライマリーケアが病院や診療所に移行した。薬局は化粧品や雑貨を扱うようになった。雑貨屋に甘んじることができなかった薬剤師が当時開発されたエキス製剤を用いて漢方に取り組んで医療に関わった。
- 九州漢方研究会は復興期漢方の中心的役割を果たした。

復興期薬局漢方の特徴

- 当時の薬剤師は病態生理に疎かったため、病態生理を考えずに処方を選べる方証相対が受け入れられ、エキス製剤の運用法をもっぱら学んだ。
- 運用法の根拠は当時わずかに発刊された医師による治験例と傷寒・金匱の条文であった。
- 総論・概論・病態生理が欠如しており、処方各論や傷寒論条文をもっぱら暗記する学習であった。処方集もあいうえお順で薬効分類はなかった。

漢方製剤保険適応以降

- 昭和42年6処方、昭和51年42処方、漢方処方の保険適応により薬剤師がほぼ独占していた漢方のシェアを医師によって奪われることとなった。
- その後東洋医学会会員は医師によって占められ、薬剤師は日本漢方交流会などの学術団体で主に活動している。
- 多くの医師が漢方を担うようになったが、それまでの延長線上で、病態生理を重視した漢方へは必ずしも移行しなかった。

第2部・3部では

- 漢方自己学習の大きな壁となっている基本的な用語、特に陰陽と虚実についてお話します。
- 2部・3部を理解すると、病態生理に基づいた漢方診断・治療を自己学習することが可能になります。
- キーワードの1つは「相対的」という言葉です。